

# 青年期の内的作業モデルと、共同体感覚やSNSでの友人とのつながりとの関連性についての検討

吉 武 久美子・浦 川 麻緒里

## A Study on the Relationship between Adolescents' Internal Working Model and their Sense of Community and Connection with Friends on Social Networking Sites

Kumiko YOSHITAKE, Maori URAKAWA

### 要 約

幼少期からの親あるいはそれに代わる人との愛着を通して形成される、自分や他者に対する認識のパターンである内的作業モデル（内田，2014）は、その後のその人の対人関係に大きな影響力を持つと考えられる。そこで、この内的作業モデルに着目し、青年期の内的作業モデルと、自己を抑圧することなく周囲の他者や集団と内的なつながりをもつことのできる「共同体感覚」の高さや、青年のコミュニケーションの道具として重要なSNSで「返事が来ない」というトラブルに対する受け取り方との関連について検討した。大学生男女179名を対象に質問紙調査を行った。その結果、内的作業モデルの中の安定の高さと共同体感覚の高さに関連があり、内的作業モデルのアンビバレントの高さが共同体感覚の低さと関連していた。そこで、アンビバレントに着目し、LINEで数日友人から返信がこない状況を取りあげた。アンビバレント高群は低群より、このような状況を相手から嫌われたと受け取ったり、不安になるなどネガティブな受け取りが多いことが推察された。現代社会ではSNSというコミュニケーションツールが常につながることができるものであるために、アンビバレントの高い人は相手からの返信が遅れているというような状況に対して、他者との内面的なつながりも切れたかもしれないと感じたり、相手への非難や不安へと感情を増幅させてしまう可能性が示唆された。

**キーワード**：共同体感覚，内的作業モデル，アンビバレント，SNS，青年期

### 問 題

人間は社会的存在であり、社会に出る青年期後期までに周囲の他者や集団とつながることのできる力を育てることが重要な課題となる。しかしそれは、一朝一夕に可能になるものではなく、その基盤は、乳幼児期からの親あるいは親に代わる人との関わり、そしてその後の他者との関わり合いを通して形成されていくものではないだろうか。

さて、近年、内的作業モデル（Internal Working Models）がとりあげられるようになってきた。これは愛着理論（Bowlby, J., 1969, 1973, 1980）においてBowlby, J.が提唱したもので、幼少期

に母親あるいはそれに代わる人との愛着を通して形成される自分や他者に対する認識のパターンである（内田，2014）。内的作業モデルを安定的，アンビバレント的，回避的なものに分ける考え方があり，嶺・大久保（2019）によると，安定型は，他者は応答的であり自己は援助される価値のある存在であるという表象をもつタイプである。アンビバレント型は，他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象を持ち，自己不全感が強いという不安定なモデルを有するタイプとされる。回避型は，他者に対して拒否的で，他者からの援助を期待できないのでこれを補完するため自己に対してきわめて自己充足的なモデルを有するタイプであると言われる（嶺・大久保，2019）。

このような内的作業モデルは，幼少期以降もその人の認知や感情や行動を調整する一連のルールとして働くといわれている（新川・桜井，2000）。さらに，内的作業モデルは対人欲求との関連も示唆されている（一ノ宮，2016）。したがって，個々人に形成された内的作業モデルが周囲の他者との関わり方に影響を与え，青年期後期における周囲の他者や集団と「つながる力」の醸成にも寄与していることが考えられる。

さて，つながる力に関連するものとして，アドラー心理学（Ansbacher, H.L., & Ansbacher, R.R., 1956）においては，中心概念の1つとして共同体感覚（Social Interest）がとりあげられている。Levitt, F. M（2019）は共同体感覚の本質は「つながり（connectedness）」であると考え，共同体感覚の中の共感，協同，そして独立の重要性を指摘した。Mosak & Maniacci（1999，坂本監訳，2006）は，共同体感覚を，「私たちがお互いに，そして，世界と共に持っている共感的で情緒的な絆」であると述べ，鈴木（2017）は，共同体感覚を，「個人と集団の共存的感覚」であると述べている。野田（1998）は共同体感覚について，所属感，信頼感，貢献感の3側面に自己受容を加えたものと考えている。さらに，橋口（2012）は，「私は人々にプラスを与える能力がある，人々は私にプラスを与えてくれるという信念」と定義している。これは「自己」と「他者や集団」の両方に対して基本的な信頼感を有していることと考えられる。

このように，共同体感覚の定義は研究者によってさまざまではあるが，いずれにせよ，個と集団との内面的なつながりを重視するものであり，かつ，集団とのつながりの中で個が抑圧されたりせず，独立し自己受容的に存在できている状態と考えられる。つまり，個人の中で個と集団の両者が適応的に共に機能している状態が共同体感覚が高いという状態であると考えられる。

日本で共同体感覚を測る尺度には小学生から成人までいくつかあるが（橋口，2012；2013，服部・向後，2012高坂，2014），高坂（2011）は，大学生や中学生を対象にした尺度を作成し，所属感・信頼感，貢献感，自己受容という3因子からなることを報告している。第一因子は「所属感・信頼感」で，現在所属している集団に対して，自分はその一員であり，その集団や成員を信頼することができるという感覚を表す。第二因子は「自己受容」で，現在の自分自身を肯定的に受け入れることができるという感覚を表す。第三因子は「貢献感」で，周囲のさまざまな人に対して自分が主体的に貢献することができるという感覚を表す。高坂（2011）では青年版共同体尺度を用いて，大学生では共同体感覚尺度が大学不適応，劣等感，抑うつ・不安，無気力などと負の相関にあることを報告している。

このような状況の中，本研究では，内的作業モデルが大学生の共同体感覚の高さとどのような関連をもつのか，また，内的作業モデルが共同体感覚の中の3因子（高坂，2011）のそれぞれに

どのような関連をもつのかについて検討を行う。

なお、内的作業モデルの尺度については、安定、アンビバレント、回避という3分類だけでなく、近年、2次元4分類が多く用いられるようになってきた(山崎・村松, 2014)。しかし、大学生を対象として、内的作業モデルと一人でいられる孤独不安耐性の低さとの関連(瀬尾, 2017)や、内的作業モデルと自尊心やネガティブ反すう傾向との関連(今野・吉川, 2017)などを調べた研究においては、3分類が用いられている。したがって本研究では、このような先行研究の結果をふまつつ3分類を用いて内的作業モデルと共同体感覚との関連を検討する。

また、現代社会に特有の人とのつながり方であるSNSが普及し、常時、人とつながることのできる社会となっている。それが逆に、一時的にでもそのようなつながりが切れてしまった場合、これまで以上に不安を生じさせることにもなることも考えられる。そこで、SNSでのつながりに依存しがちな大学生が返信が数日来ない状況に対してどう受け取るのかについても内的作業モデルとの関連の中で検討することとした。

以上のことから、本研究では、まず、内的作業モデルが内的なつながりの感覚である共同体感覚にどのように影響を与えているのかという点、また、内的作業モデルがSNSでのつながりにどのような影響を与えているかの点について検討を行う。

## 方 法

### 調査対象者

調査対象者はA県B大学生201名。その中で30歳以上や記入もれを省いた179名(男79名, 女100名)(18歳~21歳)を分析対象者とした。

### 調査時期, 実施手続き

調査は2020年5月~6月に集団で実施した。調査にあたっては、調査は匿名であり、途中でやめることも可能であり、結果は直ちに記号化され統計的に処理され個人情報の保護に配慮することなどが口頭で説明され、調査用紙にも以上の点が記載された。

### 調査内容

内的作業モデル尺度18項目(戸田, 1988)は安定、アンビバレント、回避の各6項目からなり、普段のあなたにどの程度当てはまりますかと教示し、「6:非常によく当てはまる」から「1:全く当てはまらない」の6段階で回答を求めた。

共同体感覚尺度22項目(高坂, 2011)は、所属感・信頼感10項目、自己受容6項目、貢献感6項目からなり、現在のあなたにどの程度あてはまりますかと教示し、「1:全くあてはまらない」から「5:とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

さらに、場面想定法で、「友人にLINEを送ったが、既読がついても数日間、返事が返ってこなかった」という状況で、どう感じるか、どんなことを思うかについて自由記述を求めた。

## 結 果

共同体感觉得点、内的作業モデル得点の因子ごとの得点はTable 1 に示すとおりである。男女

で有意な差は見られなかった。

Table 1. 性別ごとの各変数の平均値及び標準偏差

	男性 (n=79)		女性 (n=100)		t(df)	
	M	SD	M	SD		
所属感・信頼感	36.278	8.073	36.230	8.269	0.039(169)	n.s.
自己受容	20.316	5.239	18.790	5.711	1.860(173)	n.s.
貢献感	21.734	4.709	21.820	4.518	0.123(164)	n.s.
安定	23.899	6.023	23.250	6.382	0.697(171)	n.s.
アンビバレント	22.038	5.995	22.800	6.018	0.843(168)	n.s.
回避	18.570	5.558	18.590	5.238	0.025(163)	n.s.
共同体感覚	78.329	15.902	76.840	15.731	0.625(167)	n.s.

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

#### 青年期の内的作業モデルと共同体感覚の関連

内的作業モデルの因子である安定、アンビバレント、回避と共同体感覚との関連について検討するため、内的作業モデルの3因子を説明変数、共同体感覚を目的変数として、重回帰分析を行った。

Table 2. 共同体感覚の規定因に関する重回帰分析結果

	所属感・信頼感	自己受容	貢献感	共同体感覚
安定	0.694 **	0.426 **	0.650 **	0.697 **
アンビバレント	0.031	-0.421 **	-0.017	-0.137 **
回避	-0.245 **	0.043	-0.038	-0.123 *
$R^2$	0.573 **	0.483 **	0.440 **	0.629 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

その結果、内的作業モデルの「安定」( $\beta = .697$ ,  $p < .001$ ,  $R^2 = .629$ )が共同体感覚に促進的な影響を与えていた。一方で、内的作業モデルの「アンビバレント」( $\beta = -.137$ ,  $p = .009$ ,  $R^2 = .629$ )と、「回避」( $\beta = -.123$ ,  $p = .011$ ,  $R^2 = .629$ )は共同体感覚に抑制的な影響を与えていた (Table 2 参照)。

次に、内的作業モデルの因子である安定、アンビバレント、回避が、青年期の共同体感覚のどの側面(所属感・信頼感、自己受容、貢献感)と関連があるかについて検討するため、内的作業モデルの3因子を説明変数、共同体感覚の3因子(所属感・信頼感、自己受容、貢献感)のそれぞれを目的変数として、重回帰分析を行った。その結果も Table 2 に示す通りである。

第一に、共同体感覚の所属感・信頼感については、内的作業モデルの「安定」( $\beta = .694, p < .001, R^2 = .573$ )が共同体感覚の所属感・信頼感に促進的な影響を与えていた。一方で、内的作業モデルの「回避」( $\beta = -.245, p < .001, R^2 = .573$ )は共同体感覚の所属感・信頼感に抑制的な影響を与えていた。

第二に、共同体感覚の自己受容については、内的作業モデルの「安定」( $\beta = .426, p < .001, R^2 = .483$ )が共同体感覚の自己受容に促進的な影響を与えていた。一方で、内的作業モデルの「アンビバレント」( $\beta = -.421, p < .001, R^2 = .483$ )が共同体感覚の自己受容に抑制的な影響を与えていた。

第三に、共同体感覚の貢献感については、内的作業モデルの「安定」( $\beta = .650, p < .001, R^2 = .440$ )が共同体感覚の貢献感に促進的な影響を与えていた。一方で、内的作業モデルの「アンビバレント」と、「回避」は共同体感覚の貢献感に影響を与えていなかった。

以上より、内的作業モデルが安定であることは、所属感・信頼感の高さ、自己受容の高さ、集団への貢献感の高さのすべてと関連があることがわかった。一方、アンビバレントの高さは、自己受容の低さと関連があることがわかった。回避の高さは、所属感・信頼感の低さと関連があった。

#### 青年期の内的作業モデルとSNSで返信が来ない時の受け取り方との関連

友人にLINEを送ったにもかかわらず、既読がついても数日間、返事が返ってこなかったという状況で、どう感じるか、どんなことを思うかについて自由記述を求めた。その自由記述について研究協力者を含めた3人で得点化した。ニュートラルな受け取り(例:何も思わない、忙しいのだろう等)を1点、少しネガティブな受け取り(気になる、遅いな、何かあったのかな等)を2点、とてもネガティブな受け取り(心配しすぎて不安になる、何かしたかもしれない、嫌われたと感じる等)を3点として得点化した。評定値が3人で異なる場合はその平均値とした。

そして、内的作業モデルの3因子(安定、アンビバレント、回避)を説明変数、SNSでの受け取りのネガティブ得点を目的変数として、重回帰分析を行った。その結果、「アンビバレント」はSNSの受け取りのネガティブ得点にやや促進的な影響を与えていた( $\beta = .281, p = .001, R^2 = .068$ )。すなわち、アンビバレントの高さと、SNSで返信がこないことをネガティブにうけとる高さに関連が見られた。一方、内的作業モデルの「安定」と「回避」はSNSで返信が来ないことへの受け取りのネガティブ得点に有意な影響を与えていなかった(Table 3 参照)。

Table 3. SNS未返信に対するネガティブな受け取りの規定因に関する重回帰分析結果

変数名	ネガティブ認知
安定	.094
アンビバレント	.281 **
回避	-.133 +
$R^2$	.068 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

### アンビバレント高群と低群の、SNSで返信が来ない時の受け取り方の内容（自由記述）

そこで、アンビバレントに焦点をあて、アンビバレント得点の高い人と低い人は、SNSでの返信が来ないことを実際どのように思っているのかを調べるため、自由記述の内容を検討した。アンビバレント得点の平均である22.3点を基準に、対象となる179名の中の上位約1/4の高得点者(27～36点)45名の自由記述と、下位約1/4の低得点者(7～18点)45名の自由記述をとりあげた。そして、それらの人の自由記述を、研究協力者と3名でKJ法を参考に分類を行った。

その結果はTable 4に示す通りである。アンビバレント高群の自由記述には、とてもネガティブが20/52件、少しネガティブが8/52件で、あわせるとネガティブな受け取り方は計28/52件、一方でニュートラルな受け取りは24/52件であった。一方で、アンビバレント低群では、とてもネガティブが7/46件、少しネガティブが3/46件で、計10/46件であった。ニュートラルな受け取りは36/46件であった。アンビバレント高群と低群の受け取りがネガティブかニュートラルかについて $\chi^2$ 乗検定の結果、 $\chi^2(1) = 9.289, p = .001, \text{Phi} = 0.308$ であり、アンビバレント高群の方が低群にくらべて、ネガティブな受け取りが多かった。

そこで、受け取り方の内容（自由記述）について検討を行った（Table 4 参照）。「とてもネガ

Table 4. アンビバレント高群と低群の、SNS返信が来ない状況での受け取り方

アンビバレントH群 (27～36点) n=45

とてもネガティブ 20/52 件	嫌われた 6/20 件	嫌われたと感じる
		嫌われるような事を送ったか
		嫌いなのかなと思う
	不安 4/20 件	心配しすぎて不安になる
		不安になる
	心配 3/20 件	心配になる
	無視、ブロックされた 3/20 件	ブロックされたかな
		無視された
自分のせいかも 2/20 件	何か悪いことをしてしまったか	
	何かしたかもしれない	
相手への非難 1/20 件	いい加減な人だな	
嫌な気持 1/20 件	嫌な気持ち	
少しネガティブ 8/52 件	気になる 3/8 件	何かあったのかな
	申し訳ない 1/8 件	忙しかったかなと申し訳ない気持ちになる
	その他 4/8 件	遅いな
		返事するのが面倒なのかなと思う
返事する気分ではないのだろうと思う		
ニュートラル 24/52 件	気にならない、何も思わない 10/24 件	特に何も思わない
		特に何も
	忙しい 7/24 件	忙しいのかな
		用事かな
	その他 7/24 件	寝てるのかな
		来ないなと思う

アンビバレントL群 (7~18点) n=45

とてもネガティブ 7/46 件	嫌われた 3/6 件	何か気に障ることを言ったかな
		嫌われてしまったのかなと考える
		送信した内容が気に食わなかったのか
	心配 3/6 件	何かあったのかと心配になる
少しネガティブ 3/46 件	気になる 3/3 件	既読無視か
		何かあったのかな
ニュートラル 36/46 件	忙しいのだろう 18/36 件	どうしたのかな
		あー、忙しいんだな
		忙しそう
	気にならない、何も思わない 9/36 件	何か用事ができたんだろう
		どうも思わない
		特に何も感じない
	忘れていたのだろう 6/36 件	忘れたんかな
		返信忘れ
	会話終了 3/36 件	会話が終了した
		返事をする必要がなかった

タイプ」な受け取りの自由記述の内容については、アンビバレント高群では、「嫌われた」6/20件が最も多く、「嫌われたと感じる」「嫌われるようなことを（自分が）送ったか」などと回答していた。さらに、アンビバレント高群においてのみ見られた「不安」も4/20件あり、「心配すぎて不安になる」とか、「（自分が）何かしたかもしれないと不安になる」などが見られた。さらに、「心配」が3/20件、「自分のせいかも」と考えている場合が2/20件だった。このように数日、メールの返信がこないだけで、心理的に不安定になったり、自分が悪いのではと考えていることがうかがわれる。また、「無視、ブロックされた」が3/20件あり、「相手から無視された」「ブロックされた」と受け取ったり、「相手への非難」1/20件で「いい加減な人だな」などと考えたりと、相手側に対してネガティブに受け取る人もいることが見られた。

アンビバレント低群では、アンビバレント高群と同様に「とてもネガティブ」な記述もみられたが件数は7/46件と少なく、「嫌われた」は3/6件であった。「不安」の回答は見られず、「心配」が2/6件、相手への非難が1/6件であった。

一方で、「ニュートラル」な受け取りの内容についてみると、アンビバレント高群の場合は24/52件に対して、アンビバレント低群の場合は36/46件であった。アンビバレント低群の内容としては、返事がこないということは「忙しいのだろう」(18/36件)とか、「忘れていたのだろう」(6/36件)と考えたり、「会話終了」(3/36件)としてメールのやりとりは終わったと受け取ったりとしている。すなわち、数日返信が来なかったとしてもそれ以上、それらの行動の裏の意味を憶測しているようにはみられない回答が多かった。また、「気にならない、何も思わない」(9/36件)も見られた。

## 考 察

本研究では、社会の中で周囲の人とのつながりを実感しながら自己受容しているという共同体感覚の形成に内的作業モデルが関与しているのではないかという視点から検討を行った。

まず、内的作業モデルと青年期の共同体感覚との関連を調べた。内的作業モデルの「安定」が共同体感覚に促進的な影響を与え、内的作業モデルの「アンビバレント」と「回避」が共同体感覚に抑制的な影響を与えていることが明らかとなった。すなわち、内的作業モデルが安定的であることがつながりの感覚である共同体感覚の高さに重要であることが推察された。

次に、青年期の共同体感覚の中でも、「所属感・信頼感」、「自己受容」、「貢献感」の3つの側面のどれが内的作業モデルによって影響をうけるのかを検討した。

第一に、内的作業モデルの「安定」が共同体感覚の中の「所属感・信頼感」に促進的な影響を与えていた。一方で、内的作業モデルの「回避」は共同体感覚の「所属感・信頼感」に抑制的であった。内的作業モデルは愛着対象との相互作用に基づいて構成される対人関係に関する主観的信念や期待であり、安定的であると他者や周囲との関係が肯定的で適応的になる（山岸, 2016）と言われる。したがって、内的作業モデルが安定的であると、周囲の人たちに対し肯定的に関わることができ、周囲の人たちとの関係を近づけることができると思われる。その結果として自分のいる集団に対してもその一員であると感じることができたり、信頼できることへとつながるのではないかと考えられる。一方で、内的作業モデルが回避的であると、他者や周囲と適応的に関わることができず、集団への所属感や信頼感という共同体感覚を醸成することができないと考えられる。

また、内的作業モデルの「安定」は、共同体感覚の中の「自己受容」と「貢献感」にも促進的な影響を与えていた。内的作業モデルが安定的であると他者や周囲との関係が肯定的で適応的になり（山岸, 2016）、他者と肯定的関係を結ぶことのできている自分自身に対しても受容できると推察される。

さらに、SNSでの相手からの未返信状況をどのように受け取るのかを取り上げた所、アンビバレント高群は、数日、メールの返信がこないだけで、相手から嫌われたのではないかと感じたり、自分が何かしたかもしれないと不安になったりと、自分のせいかもと考える傾向があった。また、相手から無視されたと受け取ったり、相手をいい加減な人だなと感じたりと、相手側に対してネガティブに受け取る人もいることが見られた。森岡・鹿田・香川（2018）によると、アンビバレント型は、青年期抵抗感尺度の中の「劣等感のなさ」と負の相関があり、アンビバレントの高さと劣等感の持ちやすさに関連があるという結果であった。アンビバレント尺度の質問には、「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。」や「私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。」のような項目が含まれている。アンビバレント型は、自己への信頼の低さが自己への劣等感とつながり、相手と関わる不確実な状況をよりネガティブにとらえがちとなるのではないかと推察される。

また、アンビバレント型は、相手から返信が来ないという状況が数日であっても、不安定になることから、常に他者とつながっていないと、他者と内面的につながっているという実感がもて

ないことが推察される。したがって、アンピバレント型の人は、常に物理的に人とつながっていることを求め、SNSへの依存が高くなる可能性も考えられる。今後、SNSへの依存という点からさらなる検討が求められる。

## 引用文献

- Ansbacher, H.L., & Ansbacher, R.R. (Eds.) 1956 *The individual psychology of Alfred Adler: A systematic presentation on selections from his writings*. New York: Basic Books.
- ボウルビィ J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) 1991 母子関係の理論 新版 (I) 愛着行動 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss: Vol.1, Attachment*. New York: Basic Books).
- ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) 1995 母子関係の理論 新版 (II) 分離不安 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol.2, Separation*. New York: Basic Books).
- ボウルビィ J. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 (訳) 1991 母子関係の理論 (III) 対象喪失 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss: Vol.3, Loss*. New York: Basic Books).
- 橋口誠志郎 2012 小学校 (中・高学年) 用共同体感覚尺度作成の試み — 中核信念に焦点をあてて — 学校メンタルヘルス, 15, 2, 286-291.
- 橋口誠志郎 2013 小学生を対象とした共同体感覚と適応・不適応との関連学校メンタルヘルス 16, (2), 182-189.
- 服部 弘子・向後 千春 2012 成人版共同体感覚尺度作成のための予備的研究 日本教育心理学会総会発表論文集 54 (0), 533.
- 一ノ宮 了慈 2016 成人の愛着スタイルに関する一考察: 内的作業モデルと対人欲求との関連から 龍谷大学大学院文学研究科紀要 (38), 86.
- 今野義孝・吉川延代 2017 愛着スタイルと自尊感情との関連性: 身体感覚への態度, マインドフルネス, 反すう, レジリエンスの媒介効果, 人間科学研究 文教大学, 38, 137-148.
- 高坂康雅 2011 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究, 59, 88-99.
- 高坂康雅 2014 小学生版共同体感覚尺度の作成 心理学研究, 84, 6, 596-604.
- Levitt, F. M. 2019 "It was a kind of togetherness feeling": An exploration of social interest in early recollections. *The Journal of individual Psychology*, 75 (1), 42-57.
- 嶺 哲也・大久保 純一郎 2019 内的作業モデルが幸福感に及ぼす影響—内的作業モデル間の交互作用に注目して— 応用心理学研究, 45 (1), 58-67.
- 森岡 茜, 鹿田 優美, 香川 香 2018 大学生における適応感と内的作業モデルおよびタイプA行動特性の関連性: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要, 8, 21-29.
- Mosak, H. H., & Maniaci, M. P. 1999 *A primer of Adlerian psychology: The analytic behavioral cognitive psychology of Alfred Adler*. London: Brunner Mazel. (モサク, H. H., マニアッチ, M. P. 坂本玲子 (監訳) キャラクター京子 (訳) 2006 現代に生きるアドラー心理学—分析的認知行動心理学を学ぶ— 一光社)
- 野田俊作 1998 アドラー心理学トーキングセミナー アニマ 2001.
- 新川貴紀・桜井茂男 2000 愛着表象の複数性と変容 発達臨床心理学研究, 12, 111-115.
- 鈴木義也 2017 臨床アドラー心理学のすすめ 第3章 見立て 八巻秀・深沢孝之・鈴木義也 遠見書房.
- 瀬尾采那 2017 青年期女子における「ひとりではいられる能力」に養育者との関係が与える影響について 京都女子大学大学院こころの相談室 心理臨床研究, 8, 11-23.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説 (working models) からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- 内田利広 2014 内的作業モデルの児童期から青年期における変容—重要な他者という観点から— 奈良教育大学紀要, 125, 117-130.
- 山岸 明子 2016 内的作業モデルが仕事への取り組み方に及ぼす影響: 青年期から成人期の17年間の縦断的研究 順天堂スポーツ健康科学研究 7 (1), 1-11.

山崎 理恵・村松 公美子 2014 大学生における抑うつ傾向について：内的作業モデルの視点からの検討 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究 7, 55-62.

### Abstract

The internal working model (Uchida, 2014), which is a pattern of perception of oneself and others that is formed through attachment to one's parents or a substitute from childhood, is thought to have a great influence on one's interpersonal relationships in later life. In this study, we focused on the internal working model of adolescents, and examined the relationship between the high level of Social Interest that enables adolescents to have internal connections with others and groups around them without suppressing themselves, and the way adolescents perceive the trouble of no reply on SNS, which is an important tool for communication. A questionnaire survey was conducted on 179 male and female university students. The results showed that stability of the internal working model was associated with high Social Interest, and a high level of ambivalence in the internal working model was associated with low Social Interest. Next, we examined the situation of not receiving a reply for several days on SNS. It was inferred that students with high ambivalence received the situation more negatively than the those with low ambivalence, such as feeling that the other person disliked them or feeling anxious.

Since SNS is a communication tool that allows us to be connected all the time in modern society, it is suggested that when the connection is cut off, even temporarily, people with high ambivalence may feel that their internal connection with others has also been cut off, which may lead to blame toward the other person and self-anxiety.

**Keywords** : Social Interest, Internal Working Models, SNS, Adolescent